

時の間に此處へ來たんやろう」

「姐貴貴女は知らんが常やんは此間から講釋を聞きに行てる、難波戦記の眞田幸村が何うやとか抜け穴が何うやとか云ふてたが是れや、お前處の奥の疊をめくると抜け穴が掘つてあつて稽古屋へ出る様に造らへたあるね、ズボツと這入つてこゝの内へニユツと出るね」

「マアそんな事をして依るねやろうか、次良はんどうしまひよう」

「宅へ歸つて穴から出る處を策で伏せてやり」

「まるで馳やがな、次良はん手傳うとうや」

「よしや、常やんが穴から出たら姐貴咽を締めてやり」

「そんな事をしたら宅の常はんが死ぬがな」

「常やんが死んだら私が後へ養子に行くがな」

「そんな事嫌やし、次良はん貴郎先に宅へ這入つて常はんの出る處を捕へとう」

「よしや」

「次良貴どうやつた」

「姐貴、あかんく、最う穴から出て火鉢の前へ座つてるで」

「マア常はん、ヒイヒ……そら殺生やわ妾に内緒で抜け穴を造らへてからにヒイ……」

「マア待て、俺が稽古屋に居てたか」

「能うそんなしらじらしい事が云へるな」

「コレ、次良貴が見違へるのは兎も角も現在連れ添ふ女房のお前が見て俺やと云ふのは何うも合點がいかん、ハハン」

「フフン」

「眞似をするない、何や此間から連中が私の顔を見ると常はんお目出度さんとか何れお祝ひが有ますやろうなアとか妙な事を云ひ依るわいと思ふて居たが解つた。俺は狐狸妖怪の類ぢやな」

「常やん、コウリがヨウカン食ふたてなんの事や」

「氷が羊羹ぢやない狐狸妖怪とは狐狸の仕業やと云ふね、そんなら是れから次良貴俺と一緒に行かう」

「何處へ行くね」

「稽古屋へ行くのぢや」

「稽古屋へ何しに行くね」

「俺を見に行くのんぢやないか」

「そんなデヤラくした事が、常やんお前がお前へを見に行くてそんな事が出来るか」

「マア宜いわい、おとは、俺は行て來る依つてに、汝は宅に留守番をして居れ、必ず誰が來ても門戸